

三河アララギ

2022年 令和4年4月 卯月
うづき

四 月 号

第 六 十 九 卷 第 四 号



ニューヨーク日記(186) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

LUNCH IN MALIBU

Blue Shoe Diaries



ロスで1ヶ月のお仕事を終えて飛行場に行く途中にマリブに寄り道。お買い物とランチ！ここはBroad Street Oyster Companyと言って買ったシーフードをその場で食べれるピクニックエリアが外にあります。お持ち帰りするよりも牡蠣は氷が溶ける前に、溶けたバターがかかったロブスターはバターが温かいうちに、ポテトは熱々カリカリの内に食べないと損です。それにサンタバーバラのウニ、食べるの待てる人はそういないと思います。美味しそうですね？因みに呑気に食べていたら私たち飛行機乗り遅れました。

A quick stop in Malibu to shop and have lunch on the way to the airport. Also happens to be the only time to catch our breath after a month in LA working. This seafood shack is called Broad Street Oyster Company and there's a setup outdoors where you can eat what you bought if you want to have it right away. And you should have it as fresh as possible before the ice melts under the oysters, the melted butter on the lobster roll is still warm, and the fries are hot and crispy. And the sea urchin! Santa Barbara sea urchins are just so good! I mean, look! BTW, because we were enjoying our lunch so much, we missed our flight after this.

目次

第六十九卷第四号(通卷八二〇号)

表紙・百日草	今泉 由利(1)	水野 絹子(22)	木村 歩歩(34)
ニューヨーク日記(186)	Blue Shoe(2)	牧原 規恵(23)	今泉 如雲(35)
歌集 わが冬葵	御津 磯夫(4)	稲吉 友江(23)	矢崎 直人(35)
歌集「續々草々」	今泉 米子(5)	鈴木美耶子(23)	今泉 由利(35)
目に見えぬモノ	夏目 勝弘(6)	吉見 幸子(23)	今泉 由利(36)
窓明かり	岡本八千代(8)	牧原 正枝(23)	『酔いの徒然』(120)
雨水	弓谷 久子(10)	吉田 可琳(24)	楽しい時間(113)
たをやかに	今泉 由利(12)	鈴木 優羽(24)	絹の話(137)
味噌汁	安藤 和代(14)	阿部 姫乃(24)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
鬼まんじゅう	清澤 範子(15)	田中 瑠那(24)	『江上浩二の独り言』
つかの間	伊藤 忠男(16)	笠原 小夏(25)	初狩便り5
由比ヶ浜	矢崎 直人(18)	小松慎太郎(25)	『至誠惻怛』
中部国際空港	白井 信昭(19)	金井 海紅(25)	露台の桜
碧南人参	杉浦恵美子(20)	石川 櫻子(25)	父を慕ひて
日の温み	山口千恵子(21)	今泉 由利(30)	康鍼治療院
『ことよせ』	森 厚子(22)	今泉 由利(30)	『氷魚』のことから(255)
『ことよせ』	山崎 俊子(22)	童謡 おたまじやくしは うたうんだ	編集室だより
	伊藤 晴江(22)	東京文化会館	『三河アララギ』について
	三田美奈子(22)	『俳句』	
		植村 公女(34)	

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

牡丹の古木に花を持たすべく朱の芽たつる蘂すばえを切らむ

読みよみし故とも知らず神さびて左千夫歌集の綴また絶えぬ

苔のいろ覆はぬ雪の上をゆき柳の花の呆けし輝かがやき

さくら咲き雨ふることは習ひにて散るはならぬを幸といふ

咲きみつるさくらの花にまつはりて白き蝶とぶまことの世界

眼鏡すればわが足もとのかがやきて犬のふぐりの碧き花むしろ

さきはひてささやくごとくひらきゆくさくらの花のそよぐ枝々

忘れざる三十年前の薬札とてわれにささぐる黒海苔百枚

土佐のなまり削りて食ふもはげみにて春のいたみに耐へつつぞある

夜となれば雨といふ日の夕べちかき光の中にしばらく佇ちぬ

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

さやさやに開き始めたる初花のダチュラの花の下にゆきたり
半開になりたるダチュラの花一つ採り来て今日の厨戸を閉ず
破れ破れて静まる芭蕉葉の窓にをり今朝またわれに命のありて
ドラセナの一葉そよがぬ朝よりの昏きくもりは夕べとなりぬ
短か日のはや傾けりわが庭の花よりうつくしきさくらの紅葉
破れはててなびく芭蕉の葉の上に蚯蚓くはへて小鳥止まれり
かがやける滝と垂れたる萩黄葉たちまち過ぎて常の草徑
深量院さまの齡を一つ超えて三十三回忌の寺に候らふ
われのもつ常のバッグの白珊瑚の数珠一連はわがははのもの
ははの忌の光輝く華瓶には眺めいましし庭の本草を

目に見えぬモノ

夏 目 勝 弘

光あるときには闇はなぜ見えぬ猛暑の書斎に思ひの遊び

庭すみに蕾を付けて伸びてくる菊の花色どこでできるや

ネムの木の眠れるところにこの我も早ばや床に横になりゐる

部屋内に雑菌みち満つコマーシャルに恐れ戦くことなどはない

雑菌も必要ありて生きてゐる共に生きようと思へばよろし

目に見えぬモノを何故おそるるや朝のニュースに殺人はやめよ

目に見えぬモノをただに信ずべし両手の雑菌に害されしはなし

目に見えぬモノに戦く人多くして花を付けざるサツキもいやし

青空の青は何故青なのか思ひの遊びのできる今なり

食堂の窓より見ゆるは街を行く通行人の歩く足のみ

限界

自転車にて四時間かかりし郵便配達体重今日は三Kの減
郵便の配達先の水道より水を盗みて暑さを逃す

熱中症の予防と靴の中敷にビワの葉二枚かさねて敷きぬ

風通る蔭を見つけて休みつつ配達してゆく限界にきぬ

黒アリが見向くことなき塩センベイ赤アリ来たりて運びゆくなり

我が汗にて滲みし葉書を受箱にすみませんとひとりごちつつ

汗ふきつつ年賀葉書の注文受くるこの愚かさも仕事なりけり

片男波に合はむ計画はばみしは猛暑につづき台風九号

網戸より風の入るなし真丸き朱き月が不気味に昇る

ビールにて暑さ一時この暑さ過ぎれば止めますあと一本と

窓明かり

蒲郡 岡本八千代

夜くれば娘らの家にも灯のとりその窓々のオレンジの明かり

夜くればオレンジの色の窓明かりおまへが家にゐるからこそよ

前後川の夜の川水の黒ひかり川上よりの流るる無常

夜の川に亀は見えざり水草のみどりも見えずただ水の音

いつまでも一つのこと^{にあ}に心寄せてわが子と並び一夜のねむり

豊明の街の朝の明^{あした}けにけり新しき太陽昇りはじめつ

豊明の東の空の朝茜茫洋としてひろごりてをり

見渡せる豊明の街のあかね空けふの日のまたかがやきはじむ

きのふまでのことは忘れむ東ひんがしの空に向かひて深呼吸する

安礼の埼の御幅を仰ぎ君と誦ずす叱られしこともともどもなりき

編集室の昼半ばにさしてくるけふの小春日わが背にぬくぬく

咲かぬかと思ひゐし今年のわがダチュラ白きその花に夫の大声

遅咲きの白花二つのわがダチュラ今宵ほのかにただよふにほひ

夕風にゆれてをりけりわが夏の洗ひ干したる帽子が一つ

母と子の親離れ子離れする時か思ひつつ見上ぐる十三夜らし

雨水

豊川 弓谷 久子

家毎に豆まく声の聞えしも昔語りか今宵節分

カップに挿して机に飾りぬ咲き初めし梅の小枝を子がくれゆきぬ

御津先生の御庭の紅梅思い出す歌会にぎわいし頃の思い出

広大な御庭の中の竹藪にたけのこ堀りゐし夏目さん憶ふ

みさとより手作りマカロン届きたりお菓子作りも趣味のうちらし

真冬並の寒さ続きぬ暦でははやも雨水と言ふ日なれども

雨水とは名のみの寒さ今日も又小雪がチラリと舞ひてゆきたり

太陽のさし来る位置も変りたり日足伸び来ぬ少しづつなれど

買物に便利と又も誉められるエコバック縫ふ楽しみて縫ふ

なす事のあるは幸せ日向の部屋に今日もミシンの音は快調

奥山の梅も老木となり来たるまだ五分咲きか花のとほしき

昔はすべて梅林なりき住宅のたち並びゐるこの一画も

草むらの野水仙の花五六本摘みて帰りぬ供華に使はむ

三度目のワクチン予約とりくれぬ元気であつたし生きいるうちは

少しづつ寒さゆるむかコロナ禍の中も季節は移りてゆきぬ

たをやかに

東京 今泉 由利

和紙よりも岩絵具よりも白くしてひと花開く白玉椿

ひた走るのぞみ号の窓により今日の朝の父母の墓

ちちはは

歩みゆく歩みゆきゆく伏見道貫名海屋筆塚に会ふ

選ばれし景色の中に正座していま再びの瞬きもせず

どの道もどの家々も南天の赤き実稔れり北山の道

なだらかに起伏ありつつひと所今日の入り日の入りゆくところ

やうやうに明りを残す山際を見守りゐたり暗がるるまで

たをやかに三十六峰たをやかに今日たずねたり一つの峰を

ひと日ひと日三百年の過ぎしこと石の仏のほのぼのまろし

自らに出来ざる速度に身をゆだねどこどこまでも行かむ試み

吉野川ここより紀の川流れ継ぐこの接点に來たりしことよ

ここよりか黒潮に乗るそのままそのまま補陀洛浄土

生と死のはざまなりけり那智の海ただごとならぬ黒潮の色

積雪の高野山に登りこし弘法大師とこのひとつ夜を

神仏と共に食する共に祈る根菜青菜丸餅雑煮

味噌汁

豊川 安藤 和代

冷えまさる庭の白梅一点のペン先程の蕾つけおり

味噌汁の好きな孫いれば足腰の痛み忘れて汁の実刻む

子より孫孫より曾孫なお可愛いと曾孫抱く友の華やぎて見ゆ

目標は三千歩です未たぬ日は櫟るように冷えし風吹く

卒業式亡母^はの振り袖着ると言う孫の横顔嫁にそっくり

日に三回飲む錠剤の色に似て南天は庭にしかと位置しむ

冬空にとびきり賑やかひよの声今日節分と知りているらし

百一才便りをくるる友ありて肖りたしと吾もペン持つ

食卓にペンと紙とをとめ置きて調理間にまに詠む厨うた

コロナゆえ帰省の出来ぬ孫娘の雛を飾りぬ如月ひとり

大原は冬一色のその中に菜の花一角春を告げおり

鬼まんじゅう

春日井 清澤 範子

陽だまりに置きしシクラメンの鉢花は蝶の形に次々開く

吾が書きし四月号の原稿をいつものポストへ娘にて投函

涙あれど今朝の茶碗洗うとき小鳥は鳴きて吾を愉しぬ

庭の千両の赤き実二つゆらぎいて雪はこんもり積りゐるかな

ストーブのやかん湯げの立ち始め今の朝マイナス二度の寒さに

ケアマネージャー吾を案じて来るきたなり玄関先にて聴きとり調査

亡き夫の好物なりし鬼まんじゅう割ればこしあん二重の旨さ

孫もなし娘と顔を会わす時気まづくなるも元氣に「ハロー」

吾は介護3の認定受けをりぬ貸出しベット具合良ろしき

娘との献立メモるも斜視のため右下りに書く肉や大根

つかの間

大阪 伊藤 忠男

ほろ苦さ後に残るや露の臺春はすぐそこ食卓の味

穏やかな日差しに向かい手を広げ春の息吹を心行くまで

濡れ縁もひさびさ熱く足裏を焦がす日射に笑みがこぼれる

ヒヨドリの鳴く声朝の目覚ましに活きる力のみなぎるを知る

薄暗き庭に出でての深呼吸冷たき風もさわやかな朝

あちこちの暗きニュースにせてもの明るさ求め歌を詠むなり

明日は明日今は今とて生あるを素晴らしことと言ひ聞かすなり

西の窓開けて聞こえるせせらぎの水音心洗う音なり

つかの間のそぞろ歩きで見聞きする目にするものの新しきこと

贈られし自然の恵み黒竹の艶と雅な趣に酔う

道すがら恋の史跡に石畳見入りて日差し西に傾く

地下壕に身を潜めて幼子の「死にたくないよ」どこに届くや

戦争に勝者は無くて敗者のみ分かつていてもなぜになぜかな

「戦争を二度と起こすな」この誓い無にする暴挙夢であればと

神国と鼓舞し他国に攻めいった辛きあの頃また思い出す

由比ヶ浜

東京 矢崎 直人

三周年古書店鎌倉文学碑古本を買い葉をもらう

地の力磁力を持てる石仏の鎌倉に人惹き付く力

野紫蘭のしらんの青き実追いてハイキング リスの尾追えば雪の大仏

切り通しこも隠れる力こけむ蘿生して意志で守らる石の力で

扁額へんがくの文字に書かれし動物の文字の中から生まれる生命いのち

古道ふるみちの鎌倉街道海からの人ら辿れる古いにしえの道

由比ヶ浜お香の薫り包まれて波音耳に聴こえくるまで

由比ヶ浜夕日は沈み人影の絶ゆ鴉より鳶が多き

由比ヶ浜沈める夕日眺めて影にだんだん人はなりゆく

日を跳ねる光眩ゆく見ゆるれば心は波の安らぐに似て

中部国際空港

豊川 白井 信昭

遠面にも西風吹き晴れて御堂山尾根の稜線くつきりと見ゆる

打ち越して頂の裏尾根づたい歩みゆきぬ国坂峠

向かいゆく遠き山並み雪冠る北へ北へと国道つづく

孫を乗せ田原街道早も咲く菜の花畑睦月尽の日

門口の午後よりの陽は暖かし車の中孫まどろみている

夕方の五時を知らせる声聞こゆ車のなかにて茜空仰ぐ

雪雲の峰を搔き消ゆ御堂山たちまちにして里に降りいる

佐脇浜護岸堤ゆく向こう岸埋立地なほ工事の続く

据られてB787初号機展示館のなかの位置を占めおり

車窓より雨に煙れる知多の海張られし黒き海苔網見ゆる

碧南人參

蒲郡 杉浦恵美子

教室の模試受く生徒の静寂と外の世界の音なき小雪

豊橋に來れば自然と夫思ふとは言へ同じ思ひ出反芻

そう云えば祖母も小皿にひとつずつ惣菜載せて夕餉してゐし

さてはとて母を思えば孤食など経験せずにこの世を去りぬ

月一度何事無ければほつとして深呼吸して出づ掛かり付け齒科

ああやっぱりも保たないと上奥齒いきなり抜かる有無を言わせぬ

えっこれは二本ですかと問ひしほど抜かれた奥齒は案外大きい

上奥齒抜かれた後の空洞は齒よりもずっと深く果てなし

抜齒され落ち込むかしらと思いきや案外さっぱりもうぐらつかぬ

十キロ以上ありそな碧南人參を使う当てないのに買つて仕舞いぬ

日の温み

豊川 山口千恵子

のろのろと道横切りゆく青大将自転車止めてしばし見送る

常の道をたがへ通りぬ無住寺に太き榎の木見つけて楽し

榎の木の太き一樹の繁りゐる無住寺の庭にしばし佇む

佐奈川に沿ひつつ歩む日暮れどき堰の水音高きこゆる

真向ひに赤々と丸き日の沈む堤の道をひたに歩けり

佐奈川の堰の水音高き夕白鷺二羽のふいに飛び立つ

穏やかに微笑むごとし翁の面天窓よりの朝の日の中

手ぎは良く会すすめゆくこの人に君の面影かさなりてきぬ

黄葉せる棕の木の葉の吹かれゆく歩きゆくわれの脇すりぬけて

腹太きカマキリゆるゆる地を歩み歩み続けて草群の中

『いっしょよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

青き空に白雲黒雲疾くして攻防の中に虹の色見ゆ

森 厚子

コロナ禍の波間に漂ふ藻の如く稲荷詣での賑はひにゐる

柚子の実の香たちこむ厨にて柚茶柚ジャム瓶に詰めゆく

山崎 俊子

海までの道沿ひの家今は無く二年の間に工場も壊され

二年ぶりのこの新年に集ひゐる甥の小さき息子ら目で追ふ私

伊藤 晴江

伯父と酒酌み交はしつつ亡き祖父の思ひ出語らふ頬赤き息子

南天の赤き実に積るけさの雪その美^{いと}しさよ綿帽子のごと

三田 美奈子

降りしきる雪と南天揺れゐるを動画に撮りぬ心はづみて

幼子を待つか歳末の公園に祖父をも乗せしか藤^{とう}の乳母車

水野 絹子

動画には「慰めて!」とふ母ちゃんに「しっかりしな!」と三歳^{わか}の新菜^な

わが畑の栗の落ち葉のカサカサと風に吹かれて片隅に寄る

牧原 規惠

片隅の落ち葉除けばこつそりと春の訪れ路の臺あり

にちにち

日に動作鈍りゐる老い母よ白百合のごとき昔もありしに

稲吉 友江

娘より魚の干物届きたり福井の街は今雪の中

百合の根の入りし飛竜頭うまかりき京の味をばしきりに今日は

鈴木美耶子

わが家の郵便受けて三十年やすやすととれぬ受け箱の錆

新年に十六人にて膳囲む変はらず確かに皆の笑顔

吉見 幸子

幼らの味覚に応へあれこれと御節作りの厨の香り

短パンにランニングなる女子駅伝着ぐるみのスタッフ防護服かさね

牧原 正枝

母はダメ祖母は何とかラインOK「あー」のひと文字は略語かなにか

現代学生百人一首

東洋大学

ハグをしてそれぞれの道をいつかまたそれでも春を嫌いにならない

旭川実業高等学校一年(北海道)

吉^{よし}田^だ可^か琳^{りん}
16歳

白秋忌祖母の歌ひし童歌少し外れた音で覚えた

秋田県立秋田西高等学校

鈴^{すず}木^き優^{ゆう}羽^は
17歳

自粛中あつ森でする海水浴ゲームで感じる季節の移ろい

山形県立酒田光陵高等学校三年

阿^あ部^べ姫^{ひめ}乃^の
17歳

バツサリと自慢の髪を切った日は君の一言ずっとまってる

山形県立北村山高等学校一年

田^た中^{なか}瑠^る那^な
16歳

ありがとう言えない言葉伝えたい空っぽの弁当見て笑う母

山形県立北村山高等学校二年 笠原小夏 17歳

気づいたら手に入れていた選挙権高校生が世を変えられる

福島県立平工業高等学校三年 小松慎太郎 18歳

うすい箱つなぐイヤホン仮想世界そこから先は私の世界

茨城県立鉾田第一高等学校一年 金井海紅 16歳

プラトンもアリストテレスも教えてはくれない進路も君の気持ちも

茨城高等学校一年(茨城県) 石川櫻子 16歳

贈呈誌

青森アララギ 昭和十七年創刊 第四百十六号

○天が地を池に閉ぢ込め朝風に小波の揺れて洗ふ立山

鈴木 隆之 江別

○松前のゆたかな海の絶壁に朱き水搔きのケイマフリ棲む

内山 愛子 札幌

○たまさかに子牛にミルクやりたれば睫毛の長きを初めて知りぬ

安住 晶子 札幌

○帰りなばフキノトウ摘み天ぷらにわが生還の春かみしめむ

竹洞 早苗 青森

○冴え冴えと雲なき空に満月を久しく眺めぬ夫と二人で

笹谷 百合子 弘前

○ひそやかに花咲き終へて実を結ぶ延齡草に夕光ながし

三上 信子 青森

○コオロギの鳴く裏庭に心地良き吹く風うけてスクワットする

岩田 鶴枝子 青森

○雲谷山の右に左の紅葉葉を吹き上げ舞ひ上げ陸奥湾拓きぬ

宮川 雅子 青森

○川上の向こうに小さき岩木山夕焼けの中藍に浮き立つ

相馬 富美子 青森

○見えぬ目に吾が手を探す友の手をしかと握りて確かめ合ひたり

木浪 みつゑ 青森

○日も暮れて厨の窓から見えて来たオレンジ色のまんまるの月

成田 夏 青森

○山菜は小高い丘に萌え出づる鶯聞きつつ朝露を踏む

浜田 清勝 青森

○面会は硝子戸越しも許されず電話で寿ぐ母の誕生日

佐藤 裕扇 青森

冬雷 昭和三十七年四月一日創立 三月集 代表 大山敏夫

○山際の霜は一日融けぬまま三時三分陽は山に入る

須藤 紀子 埼玉

○日の差せる梅の小枝に止まりたる尉鶉の動き軽やか

益坂 順子 福岡

○青空に皇帝ダリアが高く咲くピンクの花びら道に敷きつつ

三好 規子 神奈川

○季節風コロナ旋風飛び交ひて人と人には「スマホ」の電波

小林 貞子 山形

○山道で飛ばされそうな帽子押さえ友と語らう今年の抱負

川俣 美治子 栃木

○「億劫」の文字のブログに朱く見ゆ予測したるや極まるときを

松本 英夫 東京

○「早春賦」ラジオに聴ける春のうたわれも歌へりあすは七草

大塚 照美 兵庫

○うす味に作りたる七種の節料理と買ひたる五品を重箱に詰む

松居 光子 三重

○子等を待ついつもと違ふ準備しつ感染者数気になる年末

西村 邦子 兵庫

○西空に今し沈まむ夕つ日に染まる蔵王を飽かず見てをり

早坂 富美子 山形

○かつて無き降雪と言ふ九州の画面に思ふ鹿児島の方

吉村 昌子 千葉

月虹 144号 2022年2月 編集発行 鮫島 満

○二羽並び鳥らの距離と時間らししばし過ごして一羽飛びゆく

佐藤 紘子

○西に向き明治通りを行き進む逆光なればまなこ開けず

成島 哲子

○巨大地震津波原発事故に続き集中豪雨コロナ禍の日本

駒ヶ嶺 泰秀

○あなたより届きし本はやはらかく手のひらにあり飛鳥を解けり

横山 鈴子

○里山ゆわが庭の木に這はせたる軒忍はも葉を殖やし継ぐ

鮫島 満

○全天に一等星が二一個と初めて知りぬ宇宙科学館にて

清水 和子

○カーテンに光弱めて本を読むこの楽しみは死ねばなくなる

小林 勝

○ゲルニカを映す8K大画面見つむる子等のまなこ清しく

山口 京子

○顔半分マスクに覆ひ眉と目と半人前の私がゆけり

桜井 範子

○わが短歌^{うた}を諳んじくれし友ありて声を聞きつつ涙こぼるる

水上 信子

○メルボルンの四季はひと日に巡るゆゑ雲の切れ目をけふも読み取る

井村 喬泉

○緊急の休園メールに明日からの子供の十日大人の十日

八幡 道子

ことのはスケッチ

今泉 由利

ブエノスアイレスに住んでいた頃、私宅には、遠く日本から様々な方達が様々な目的で訪ねてこられた。

アンデス山脈に登る人、南極へ行く人、冒険をする人、ヨットで世界一周の途中の人、タンゴの好きな人、学会へ出席する人、仕事の人……。そして、その後もお付き合いをさせていただく方、消えてしまわれる方……。

東京農工大学の近藤典生博士は、南米の動物、植物のこと、地質や化石調査、ほろびゆく動物たちのこと……。天皇家の先生という方なのに、アルゼンチンに来られると、私のアトリエに滞在された。私のアルゼンチンの母セリーナさんとも言葉などを超越してしまう仲良しだった。

日本から一番遠い国での、私の日本風ごはんも心よく召しあがって下さり、一方私が日本に帰った時は、博士の研究室にお邪魔し、世界中の珍しいことごとくに触れさせていただくのだった。そして、日本の「おいしさ」を

も教えていただいた。

近藤博士が亡くなった。大きな目標を失っていたこのごろ、博士との縁が巡り、素晴らしい紅茶にであった。

ひと袋の、その紅茶を手にした時、茶葉の姿の美しさ、上品さに驚いた。何が何でもこの紅茶の近くに居たい、と思ってしまうた。

琥珀色の液体は光にあふれ、宝石よりも美しく、口にやさしい。そして全身に喜びとなって沁みわたる。

スリランカ、セイロン島は標高千五百メートルのUV A地方に茶畑をもつ紅茶コーディネーター、氏の命の紅茶、芸術品と知る。

彼女の行動の全てが「他人の為に」「スリランカの恵まれない子たちの為に」と基づいており、なぜUV A地方のUV A茶であるか、とは、古来より伝わる紅茶の製法を絶やさないう、紅茶作りにたずさわるスリランカの人々の生活面より支援をしつつ、昔ながらの「人の手」の範囲の伝統を守っている。

他人の梱包や輸送にまかせられず、毎月スリランカの茶園まで出掛け、自ら茶葉を大切に運んでこられる。そ

して「今月の風が良かったから、とても良い出来ですよ。是非楽しんで下さい」とお届け下さる。

私の店の商品として、恵まれない子供達に、紅茶産業に、義援金としてお届け出来るよう、アルゼンチンの蜂蜜も福祉施設のお役にたてるよう。

地球上の公害や農薬などからかけはなれたアルゼンチンの大草原に咲くアルファルファの花より、日本の律儀でもって大切に採取された蜂蜜と、高い高い山の茶畑の、最初の三つ葉だけを手摘みされたUVA茶とが出合い、私の朝々の本当の味。安らぎの味。この出合いを宝と思う。

蜂蜜のことをはじめたら、素晴らしい紅茶に出会え、これからを自分の実力以上に生きてゆかれる予感がしている。

おたまじゃくしは うたうんだ

高橋 育郎

一

おおきなあたまに　ちっちゃな目
おたまじゃくしは　しつぽをふって
ワイワイガヤガヤ　にぎやかだ
水がぬくんで　うれしいのかな

二

エプロンすがたの　おかあさん
あさのキッチン　いそがしい
おなべのなから　いいにおい
おたまじゃくしで　すくいましょう

三

しつぽのあたりに　あしがはえ
五線のうえに　ならんだよ
おたまじゃくしは　ほんりようはつき
みんなでたのしく　うたうんだ

東京文化会館

先日、2・19夜のTV番組で、東京文化会館をやっていました。

当 文化会館は、S36（1961）音楽の殿堂、芸術文化の発信拠点として、上野駅公園出口前に建てられました。設計者は前川國男。ガラス越しに上野の森が見えて、森の中の殿堂として設計されています。床から柱までが、その雰囲気を出しています。

当館がオープンしたとき、祝賀行事が、いくつか行われ、その一つが合唱祭でした。
ここに国鉄合唱団が出演しました。

東京交響楽団。指揮は朝比奈隆。当代一といわれていました。

このとき出演した合唱団は、早稲田大学グリークラブ。慶応義塾大学ワグネルソサエティ。日本女子大学。農林省合唱団。そして国鉄でした。

曲目は、交響詩「千曲川旅情の旅」で、4楽章で、この詩を歌いました。

合同練習を二回ほどやりましたが、朝比奈隆のオーラに圧倒されました。タクトに自分の声が吸い込まれるような感覚になりました。

我が青春の意気を高らかに歌いあげた気持ちで、忘れられない貴重な思い出です。
現在は、20年ほど「山岡鉄舟研究会」の月例会で、当館の講習室を使っています。

『俳句』

戦争はもうやめようよ春疾風

空っぽの駅前交番涅槃西風

煙突の煙まつすぐ春旱

明星と二十六夜の月冴えて

五輪ほど散り急ぎたる古臘梅

早春賦歌えば川に水車あり

造成の建機の響き梅一輪

鳩鳴いてひとりスマホに音も無し

植村公女

お変わりございませんか。
コロナ注射はすみしましたか。
私もボチボチと暮しています。

木村歩歩

大正のれんが倉庫の大氷柱

今泉如雲

ガラガラと来る漆黒のラッセル車

迷ふことなく買ふ天然鰯のカマ

鎌倉の小さき谷間梅の花

矢崎直人

梅の香に誘われ長谷の寺の前

観音の鯉の背ナにも春の雪

自らへ期待ほのかに春うらら

今泉由利

何鳥か小さき足跡春の土

春日和釈迦如来像彫りあぐる

手作りの味噌熟成すひな祭り

雛井籠^{ひなせいろ}安永よりか伝ひ来る

戦争

今 泉 由 利

今日の、地球で、人間どうしが戦う。戦争。いたたまれない。どうして良いのかわからない。見ない！知らない！でいるわけにはゆかない。戦争を止めてもらえる方法を持ち合わせていない、私に出来ることは何もない。

ただただ、身も心も、うろろうろろろ……するばかり。あまりにも情ない。焦燥感に苛まれる。

空襲警報が鳴り渡る。その当時小さな小さな女の子だった私。神経痛で身動不自由な、おばあ様の隠居部屋へ、すつとんでゆく。母から、言い聞かされていた。「おばあ様を守る係り」を果すため。

祖父の代からの、開業医の家だった。家族で生活しながら入院している患者さんが居たり、お手伝いさん達、看護婦さん達、玄関の待ち合い室には、大勢の診察を待つ患者さん達。この状況で、父は、軍医として戦争に行ってしまった。隠居ま近の、おじい様医師に診療の任がかった。

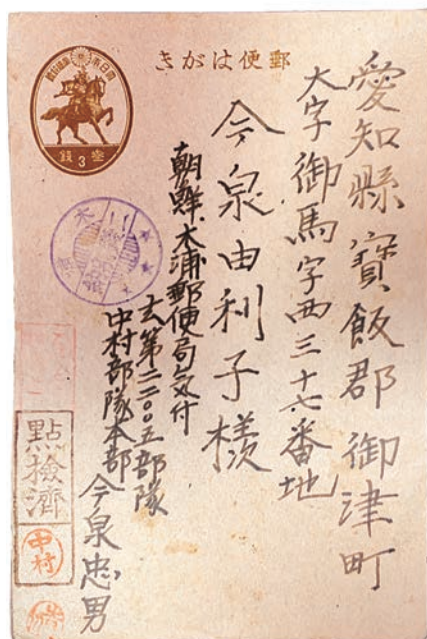
母は、今泉医院を守るため、私の長姉に医科を学ばせていた。

こんななか、本当の戦争が、身近に襲ってきた。

けたたましく空襲警報が、けたたましく。良く歩けない、おばあ様の全身を支えるつもりになっても、庭に造った防空壕まで、懸命だったけれど……防空壕まで……満員になっちゃっていただけで、最後の二人。扉を閉めたところ、爆風で、扉が吹っ飛んだ。おばあ様と私は、助かった。父が、軍服で、とっても臭くなつて帰ってこられた。あの時の、うれしかったこと。おばあ様を守るという任務が果たしたこと、この気持は、今もしっかり私のものになっている。

今は、住所表示は変わってしまったけれど、愛知県宝飯郡御津町御馬と、万葉にも、歴史的にも由緒ある所に、生れ育ち、父の教えのように、世界へ向ってみたりして、日本から一番遠く思える国で、もうひとりの母と思う人にも出逢えた。

私の小さな次元ではあるけれど、出逢うことが出来た方々、皆、皆、皆、大好きです。出逢えて本当にありがたいとございます。これからもいろいろな方々に出逢つて、出逢いをよろこび、大好きになり、みんなで、うれしくなりながら、生きてゆきたい。戦わないで。



『酔いの徒然』(二二〇) 丸山 酔宵子

『向日葵と戦車』

新コロナ禍の不安な日々が全世界を覆っている中で、ウクライナでは信じられない事が引き起こされている。

戦後生まれとはいえ、太平洋戦争時の悲惨な状況は、父母をはじめ映画や当時のニュースで我が実体験のように感じている。空襲警報、サイレン、防空壕、防空頭巾、バケツリレー果ては、竹槍での「鬼畜米英!」「欲しがりません!勝つまでは!」等々・・・。

今、将にウクライナでそんな悲惨な事態が現実になっている。サイレンが鳴れば地下壕や地下鉄に逃げ込む人々の姿。小雪舞う寒さの中、隣国ポーランドやハンガリーなどに脱出する人々、その数は100万人にも及ぶという。首都キエフまで25キロに迫る不気味な戦車の列。ウクライナ人の氣勢を削ぐためか、夜も明けきらぬ寒い朝、キエフのテレビ塔までミサイル攻撃され燃え上がっている映像が報道された。

凍星やミサイル撃たるテレビ塔

酔宵子

何故、ウクライナでこんな悲惨な事態が引き起こされるのか。

ウクライナの地勢的位置と歴史を紐解いてみると、ウクライナは東ヨーロッパに位置し、東はロシア、西はポーランド、スロバキア、ハンガリー、南はルーマニア、モルドバ、北はベラルーシに国境を接し、アゾフ海、黒海に沿った海岸線を持っている。

面積はヨーロッパで2番目、人口は4130万人で8番目とともに、ロシア、フランスに次いでヨーロッパで3番目の軍隊(25万人)を保持している。

中世には東スラブ文化の中心地でキエフ大公国と言う強力な国家がウクライナの誇りあるアイデンティティの基礎を形成した。

しかし、13世紀以降はモンゴル帝国の侵攻により領土が破壊され、ポーランド・リトアニア共和国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国、ロシア・ツァーリ帝国など様々な国によって支配され分割された。

17世紀から18世紀にかけてはコサック・ヘーチマン国家が誕生し繁栄したが、その領土は最終的にはポーランドとロシア帝国の間で分割された。しかし、ロシア革命後ウクライナの民族自決運動が起こり、1917年6月23日、ウクライナ人民共和国が宣言され国際的にも正式に認められたのである。

第二次世界大戦後には、ウクライナ西部はウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国に合併されソヴィエト連邦の

一部となったが、1991年ソヴィエト連邦崩壊により、ウクライナは晴れて独立を果たし、中立国を宣言したのである。

その後、ロシアや他のCIS諸国との限定的軍事提携やNATOとも提携を結んでいるが、2014年3月のロシアによる突然のクリミア併合、2014年4月のドンバス紛争が引き起こされる。

2016年ウクライナは欧州連合(EU)加盟に大きく舵を切った中での今回のプーチンの暴挙である。

ウクライナと言えば、国花である「向日葵(ひまわり)」。

何と言ってもソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニが共演した名画「ひまわり」。監督はヴィットリオ・デ・シーカ、音楽を「ティファニーで朝食を」や「ピンクパンサー」などで知られるヘンリー・マンシーナ。

第2次大戦下、陽気なアントニオ(マストロヤンニ)と結婚したナポリ娘ジョバンナ(ローレン)は、夫を戦争に行かせないために狂言芝居までするが、アントニオは地獄のソ連戦線に送られてしまう。終戦後も戻らない夫を探すために、ジョバンナはソ連に向かい夫の足跡を追う。しかし、広大なひまわり畑の果てに待っていたのは、美しいウクライナ娘と結婚し、子供にも恵まれた幸せなアントニオの姿であった。

劇中幾度か登場する地平線にまで及ぶひまわり畑の美しさが圧巻で、ウクライナ的首都キエフから南へ500キロほど行ったヘルソン州で撮影されたそうだ。

実は、40年ほど前、鮮やかなひまわり色のツーピースを着こなした生ソフィア・ローレンが、大阪梅田旭屋書店での自著『ウーマン&ビューティ』サイン会に突然現れ、将に目の前に……。

スクリーンでは豊満なセクシャルボディを惜しげもなく露出し、限りなく肉感的であるが、生ソフィア・ローレンは思いのほか背が高くスリムにさえ見える。しかし、その妖艶な眼と男を蕩けさせるような唇は健在で、今でも思い出すと「ゾクゾク……」とそのオーラが甦る。ソフィア・ローレンが動けば多くのファンと野次馬が「ウオー、ワー……」と歓声を上げ動き出す。と……どういふ訳かこちらをジューツと見ている。錯覚か、自意識過剰か。「……ドキ、ドキ、ドキ……」これは半世紀前の正夢であったのです。

ウクライナは美人の多い国として有名であり、どういふ訳か大変な親日国でもあるそう。我が国としても正式に難民受け入れを表明したのであるが、一日でも早く両国の平和の話し合いが進むことを願ってやみません。プーチンさんよ！どんなことがあっても核ボタンは押してはなりませんぞ！

向日葵やソフィアローレン夢に立つ
ひまわりの畑蹴散らす戦車隊

酔宵子

楽しい時間 113

山本紀久雄

2022年2月28日

九代目市川團十郎・・・其の十九

九代目市川團十郎の歩みは、江戸期に「演劇」的完成をみた歌舞伎を、明治という時代に向けた転生への苦闘の軌跡にほかならない。

その苦闘した有様を前号までに見てきたが、歌舞伎は壮士芝居という新しい相手が登場したことで、本来の役者の芸をはじめとする様式性を守り通す道を選択するに至った。

明治27年（1894）11

月の歌舞伎座興行・日清戦争劇『海陸連勝日章旗』失敗以後、『暫』や『京鹿子娘道成寺』といった様式性豊かな舞台を再生していくようになったのである。



九代目市川團十郎の鎌倉権五郎景政

『暫』のストーリーは松竹株式会社の「歌舞伎演目案内」によると、鎌倉は鶴岡八幡宮の社前で、清原武衡と加茂次郎義綱がそれぞれ奉納するものをめぐって対立している。すでに天下人になった気である武衡は、自分の家来になるよう義綱を脅し、義綱の許嫁・桂の前にも自分になびくよう迫る。二人が拒絶すると、怒った武衡が全員の首を刎ねるよう命じ、義綱たちは絶体絶命の大ピンチに。

その時、どこからともなく「しよらく」の大きな音声が響き、罪のない人たちを救うヒーロー・鎌倉権五郎景政が花道から颯爽と登場し、先ず花道にどつかと座り大音声で「つらね」と呼ばれる先祖由来の文句をちりばめた自己紹介を豪快に述べる。そのいでたちは戦隊モノ並みの大迫力の重装備。武衡に味方する人たちは、突如現れた邪魔者を追い払おうとするが、みな軽くあしらわれてしまう。権五郎は悠然と舞台中央まで進み、豪快な「元禄見得」を見せる。

壮士芝居をきつかけに、九代目は人生の節目というべき大変化、それまでの「活歴もの」を捨て、役者の芸をはじめとする舞台の様式性を守り通す道を、五十七歳になり選択するにいたったのであるが、たが、いまひとつ納得がいかない。九代目の心理分析について追及が甘いと思う。もうひとつ大事なことがあったのではないか。

私の経験をお伝えしたい。もう随分前になるが、銀座で名前を聞けば誰でも知っているブティックのオーナーから連絡があった。用件は「専務に会ってほしい」ということ。

用件はすぐに予測できた。この当時、このブティックは経営不振であり、その要因は品ぞろえの責任を負っている専務の仕入れにあった。欧州へ仕入れに出張して輸入していたアイテムが客から反応がよくない。つまり、売れないのである。仕入れアイテムを変更するしかないわけだが、専務は頑なに拒んでおり、その理由を「客が悪い」と表現する。客が当店の素晴らしい品々を見抜く力がないが悪いという。専務はかつて有能なバイヤーとして名を連ねていた。いつの間にか時流・時勢が変わっていたのであるが、その変化を知りつつも、仕入れという場面で自らを変えられないままだったのである。しばらくしてこの専務はブティックを去っていった。結果として、このブティックは今でも営業を続

けている。専務の交代が時流・時勢と客を取り戻したのである。この事例は実際の出来事であるが、これと同様のことは九代目には適応出来得ない。何故なら市川団十郎家は、歌舞伎界の大名跡で二枚看板である。九代目市川団十郎はひとりしかいないのである。だから九代目の自らの変化を待つしかない。では、どのようにして「舞台面の様式性を守り通す道」を選択するに至ったのか。

人は変化する時には必ず何かの節目があるはず。九代目の節目は、以下のようなではなかったかと思う。

第二節は十三歳の「当時の演劇で仕て居るのは皆嘘だ」と思ったとき。第二節は明治維新を迎えたとき。第三節は「求古云」を作ったとき。第四節は鉄舟邸に通ったとき。第五節完成期は「活歴もの」を捨て、役者の芸をはじめとする舞台面の様式性を守り通す道を選択するに至ったとき。第五節完成期に至ったことを、九代目は次のように語っている。

《演劇は時勢と共に移行行かんこと尤も必要なり、われらがいふまでもなきことなれど適者生存の今日に演劇ばかり後れてよき訳はなけれど、古昔よりある狂言は甚しく猥褻なる処とか、不倫理なる処とかの外には手を入れぬが好しと思ひ初めたり、一体旧来の芝居は不自然なるが如き間に一種の趣味のあるものゆえ、徒に理屈のみにて矯正する時は却て全体の趣向を全滅する恐あればなり》（『明治歌舞伎の成立と展開』漆原その子著 慶友社）

つまり、見物客が求めてやまない「旧来の芝居」がもつ江戸的な趣向の内に、「種の趣味」があることを発見したので「活歴もの」はやめたと述べたわけで、自ら方針を転換させたのである。

そこへのヒントは鉄舟から学んだと推測する。九代目が鉄舟邸

に足繁く通ったのは、鉄舟が大悟に至る過程で貫き通した厳しい禪修行の過程を学ぶこともあったが、もっと大事なことがあつたはず。それは鉄舟が明治天皇の侍従に就いたことに関係する。鉄舟が侍従になったのは西郷隆盛の推薦であり、その背景に慶応元年（1868）3月9日の駿府における西郷隆盛との「江戸無血開城駿府談判」がある。談判における鉄舟の行動に感じ入った西郷が、鉄舟を高く評価し、明治天皇の侍従へ強く推薦したのである。

この交渉から4日後の慶応4年3月13日、勝海舟と西郷の第一回会談が芝高輪の薩摩屋敷で行われた。海舟と西郷はすでに面識があり、会談後2人は愛宕山に登った。

そのとき西郷が「命もいらず、名もいらず、金もいらず、といった始末に困る人ならでは、お互いに腹を開けて、共に天下の大事を誓い合うわけには参りません。本当に無我無私の忠胆なる人とは、山岡さんの如きでしょう」と語った。

この文言が、後年西郷の「南州翁遺訓」の中に二節として記されたが、これは正に鉄舟の武士道精神真髓を示したものであつた。

司馬遼太郎は作品としては鉄舟を取り上げなかったが、講演の中で次のように語っている。《山岡鉄舟はミスター幕臣といつてよい存在でした。非常に立派な人で、侍の鑑というような感じだった。たいへん自律的な、自分を完全にコントロールできた精神の人です》と。

さすがに司馬遼太郎は鉄舟に対して、正鵠を得た見方をして

いる。しかし、この当時の鉄舟山岡家は百俵二人扶持という軽輩である。この立場・身分のものが將軍に直接お目通り適うのであろうか。次号に続く。

絹の話（137）

「アトリエテレビ」今泉雅勝

織物を作らなかった人々と暮らす（1）

この度は絹に直接関わる話からそれてしまいましたが、織物を作った事がない、金石併用時代的生活様式を続けている人々と暮らした事を少しお話したく思います。それは私が人間にとって「美」とは何かを探し求め、1970年南太平洋のニューヘブリデス諸島の島々への旅でした。それは部落の皆が認める仕事をした時、それが認められた証に石斧などでその人自身が作る3〜4mもあろうかと思われる人の顔を模した「アティンティン」と言われる木造彫刻に会いに行く旅でした。

織物文化を持たない人々

人類はいつの頃から衣類を着る様になったのでしょうか。ホモサピエンスは20万年前アフリカ大陸を出て東西に拡散して行きますが、7万年前から1万年前まで続く氷河期に遭遇し、獣衣などを纏い始め、次第に植物繊維や獣毛を編んで利用する様になったと言うのが通説です。

すると、織物の文化を持たないニューヘブリデス諸島の人々はオースロリアやニューギニアが陸続きの氷河期に赤道直下のこの地域にやってきた人々なのでしょうか。

その後地球の温暖化で海水が上昇し、人々は赤道直下の島となった所々に取り残され、数万年以上今日に至るまで衣類を必要としなかったのでしょうか。

裸の衣装

英仏共同統治の行政機関のあるエスピリットサント島を中心にアレクラ島、アンブリム島など各島ごとに生活様式も体型も違い、どこの島も海岸線の住民は社交的でほぼ我々と同じ服装ですが、島の中まで行くとスモールナンバース族という人たちが住み、成人男性は裸体の腰に樹皮で作った太い腰ベルトをして、自分で作ったペニスサックをベルトに蔓紐で吊るしています。人それぞれが念入りに作って、ツヤツヤ黒光りするものもあり、その人の人格が推し量られました（織物の短パンツの人もありました）。島の中央山岳地帯の成人男性のペニスサックは島中部の人と同じですが、どの人も竹ヘラで上半身を畳み表の様に傷つけそれが盛り上がりつつワニ肌になっています。一人前の男になった証だそうで、やや好戦的な感じを受けました。私も酋長に会って対等に話をするためには顎髭と上半身の施術をしなければならぬと言

われましたが、なんとか回避しました。

また他の島の中央部の男は毎朝二本の蔓を編んで腰に巻き木の葉のついた枝を挟み込で腰褌の様にしています。この様な所では女性と子供に会う事はめったにありません。女子供は成人男子とは違う家に住んでいる様です。未成年の男子はロングハウスに集団で生活しています。たまたま出会った成人女性は長い木の葉を細く裂いて乾燥させたポリウムのあるサラサラとした物を付けていました。海岸線に住む人たちは普通に町から入手した短パンをはいていますが、上半身は裸です。家のまわりでは若い女性も半裸で少しも違和感はありません。シャツを着ている私の方が不思議な存在でした。お前もシャツを脱げと言われて裸になってみましたが、異口同音に裸姿はとても似合わないと言われました。

何れにしても彼らに自ら織物を作って着るという文化は見られませんでしたし、それを積極的に取り入れようという姿勢もありませんでした。

ただ彼らの生活の中で織物に近いものといえば蔓で編んだ紐が生活の各所に使われていました。蔓で編んだ目の粗い袋を額に紐を掛けて裸足で持ち歩いています。

編み物は人類が織物を始める以前の行動パターンです。ので、やはり彼らはこの地に移動して来て、数万年変化することなく静かに暮らして来たと思われるます。

裸の暮らしぶり

屋根が葺の様な草葺きで雨が多いせいか、何処の部落でも壁などに比べて屋根はしつかり出来ていました。家の中央に囲炉裏（焚き火的）が有り、多くの物をそこで木の葉に包んだりして焼いて食べていました。その日に食べる分だけ収穫し、いつも完食で残しません。勿論食べ物の保存備蓄はしていません。他の動物と同じ様に着の身着のままその日暮らしです。食料を保存することは牙の生えた野豚などの群れに襲撃されるからだそうです。襲撃を避ける為、家の周りに深い環濠を巡らしている部落もありました。家財道具もない極めてシンプルな生活です。

人生は長い

海岸線にはヤシの実やパンの実がたわわに実り、少し分け入るとタロ芋が大きな葉を広げており、腐食倒木を石斧で叩けば虫の幼虫がゴロゴロ出てきます。

野生の野豚を勝手に目視して自分の物だと所有権を主張する事がありますが、家畜にはしていません。私的私有物は野豚の牙の腕輪、鼻輪（有力者の誇示）、祖父、父などの頭蓋骨に化粧を施したペンダントなのです。

毎日変化なく、同じ様な事を繰り返していると人生は長いと感じます。イソップ物語のロバの話（神様に8年以上の歳を返した）を思い出します。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2022年3月16日

花粉を室内にためないように

毎年今年の花粉の飛散量は例年の〇倍多い！

と言われ続けていました

今年は飛散時期も早めな上に確かに言葉通り多いです

そこで

ついつい怠ってしまいがちなのが換気です

換気すると室内に花粉が入ってしまうのですが

普段の生活で外出先から帰ってくるたびに

室内に花粉をため込んでしまいます

そこで大切なのは

換気しながら掃除機をかけること です

その際

空けた窓にレースのカーテンを引いたままにする

花粉の侵入を軽減できます

掃除機をかけ終わったら空気清浄機を稼働させ

5〜10分待ち

レースのカーテンを叩き

寝室の掛け布団を叩き

マクラを叩き

それから窓を閉めましょう

もちろん叩き動作は窓を閉めてからでもかまいません

睡眠確保が何よりも大切です

寝室は念入りにやりましょう

今日も笑いながら行きましょう

2022年3月18日

真冬の意識で

身体を芯から冷やさない様にくれぐれも注意が必要です
今日も笑いながら行きましょ

ここ数日 春を感じるというか

日中は汗ばむくらいの陽気でした

予報では

今日は気温がグッと下がるらしいです

暖かさに慣れるということとは

身体は完全に春仕様になっています

ということとは

寒さには回っていない身体になっています

気温はそこまでではなくても

真冬以上の寒さを感じるかもしれません

季節の変わり目の寒暖差

気温が下がる日は暖かかった記憶は消して

真冬の服装 寝具 という感覚で行きましょ

「江上浩二の独り言」 52

江上浩二

小椋佳さんの縁語と創造性

作詞家の小椋佳さんは若い時に相当悩んだそうだと。人は何故生きているのか、創造性のみが生きている証にみたいな哲学的に深く思慮することなく、東京大学を卒業してしまい社会に出てしまったことを悔いていることを吐露している深夜TV番組を令和3年7月の最後の日、8月1日にならんとする前の時間帯に私は観たのだ。

私は創造性が人の生きている証だというような小椋氏の哲学的な思惟もせず、機械的に、人間味もなく只、効率よく発明をしたい、創造をしたいと理由で、よく世間で言われているような閃きで発明出来たとか、創造できたとかというプロセスをもっと科学的にやりたいと、若い頃から考えていた。次のイノベーションというプロセスを外部からインプットする前に、図解は省くが言葉の連関性を少し数学的に纏めることによって出来そうだとすることを、サラリーマンを早期退職してコンサルティング業を始めて、異業種セミナー、コンサルティングセミナーで紹介する機会もあった。

イノベーションという既存にあるものを新しい組み合わせで、今までにない機能や効果をもたらすという行動、活動が単に科学的発明という領域でなく、ビジネスの領域で叫ばれ、興隆し、大きな成果や事業実績を欧米企業があげて、国内企業も後を追いかけて、それなりの成果を示している。

さて、小椋佳さんは作詞をする際に、縁語（ご縁があるという表現を使うが、類似している言葉、仲間のような言葉）を用いて、言葉の世界を広げて、創造性を高めているようなお話をされていたのだ。例えば、海という言葉から島、波というような縁語を発生させて、さらに生まれた島や波という言葉から次々と縁語を発生させて、言葉を紡ぎ、唄の歌詞を創造していく独自のプロセスを作り上げたそうだと。それらはまさにイノベーションであって、苦しんで生み出すそうだと。そのTV番組では奥様の談話があつて、本当は楽しんでやって欲しいとの事だった。小椋さんの縁語というやり方は中心の言葉があつてその言葉から比較的容易に類推、創りだせる言葉の集合体といえる。

閃きを科学するプロセスは言葉、そのものではなく、言葉の集合体で説明される知の一つの事象で、例えば中心の事象xxがあつて、容易に類推できる事象xxxと容易には類推できない事象yyyがあつて、容易に類推出来ない事象をあ

る段階、あるステップで繋ぎ、今までにない事象を見出して
いこうとする方法である。

小椋さんの縁語でも、海から容易に創りだせる島や波とい
う言葉でも、逆に島から「海」という言葉を思い浮かべる重
みと波から「海」という言葉を思い浮かべられる重みとは同
等ではなく、違はずである。それも人の経験や背景で違うの
も当然であろう。海から島を思い浮かべる頻度と島から海を
思い浮かべられる頻度が異なるということだ。

異業種の会などで私の紹介した5つの事象例は

- A 水は0度で凍る。
- B 氷は0度で溶ける。
- C コップに入れた水と氷の共存、冷たい飲み物
- D コーラを飲む。炭酸水、氷、味の共存。
- E 塩を加えると温度が下がる、添加物を加えると凝固
点温度が下がる。

ここで一つ一つの事象の間に連関ベクトルを定義する。一
般に連関ベクトルの大きさの特徴は異なり、例えばA―B
B―Aはほぼ同じ大きさと思われるが、A―E E―Aは異
なる。さらに、A―C C―AやC―D D―Cも異なる。

さて、これらの事象を4ステップで繋ぎ、その連関ベクト
ルが小さいと推定されるルート、D―C―A―Eによって、
コーラを飲む―添加物を加えると凝固点温度が下がる と
いう普通は類推しないような事象にも注目してみようとい
う、知的財産創造プロセスへのアドバイスになると信じ、提
案している。紙面が限られているので、ご自分の創造したい
領域で、考えてみてはいかがでしょうか。

素人の戯言で申し訳ないのだが、小椋さんの縁語は文字が
読めない・書けない小さな子供でも諸んじられる音を中心と
した「ことば」で紡がれ、自然発生的に創造される歌詞とメ
ロディーが上手く共鳴するように織り重なって、心地よい歌
を沢山生んだものに違いないと確信した。

「歌創り50年青春に帰る」というTV番組のタイトルも、
何か老け込んだと言っても怒られない、誰もが否定はされな
い今現実の小椋さんではあるが、彼の若さ、あどけなさは彼
の歌詞・メロディーに染み入っており、それらが若い人に引
き継がれ口ずさまれ、生き続けていく。

初狩便り
(5)



花
野
み
ぷ
り





水あげ

初狩に春到来。草は萌え、花は咲き、鳥は囀り、水ぬるみ、農民は田畑に出る。

まずは半年休んでいた水路を整備する。枯草を取り除き、水漏れを補修し、詰まっている箇所がないか点検する。そして笹子川に手作りのダムを作り、川から田んぼに水が回るようにする。この作業を初狩では「水あげ」と呼び、春の大仕事である。川の真ん中で腰まで水につき、鉄杭をハンマーで力いっぱい打ち付ける。この作業は力持ちの男性でないとできない。竹林から切ってきた竹を割き、真藎、土嚢で水を堰き止め、水路に水を回す。乾いた水路にじわりじわりと水が浸み込み、一帯を潤したあとは、進む。

水路にさらさらと水が流れる様は、歌い出したいほどの喜びである。田に水が入ったその日から蛙は啼き出し、やつと生きていた植物は水を得て生き返り、生きとし生けるもの、春を謳歌する。

水の入った田んぼは景色が一変する。荒代掻きから始め、本代掻きと進めていく。春風を受けながらの代掻きそれは気分が良い。

『至誠惻怛』

中屋保之

司馬遼太郎氏に「峠」という名著がある。この本の主人公である河井継之助が、恩師である山田方谷のもとを離れる場面を、別れる朝、継之助は門を辞し、丸木の橋を渡って対岸の街道に出た。方谷は門前で見送っていた。継之助は路上に土下座した。土下座し、高梁川の急流をへだてて師匠の小さな姿をふしおがんだ。この諸事、人を容易に尊敬することのない男が、いかに師匠とはいえ土下座したのは生涯で最初で最後であらうと描写している。この本に出合ったのは、かれこれ五十年近く前である。私にとって当時は、幕末の越後長岡藩家老で、戊辰戦争に際しては「中立主義」を旨指すも叶わず壮烈な戦死を遂げる河井継之助を主人公とした『時代小説』でしかなかった。『山田方谷』^{ほうこく}という人物名に興味を持ったのは、倉敷支店勤務中のこと、「山田方谷をNHKの大河ドラマに！」という揭示物を結構見かけたからである。中国山地を超えて鳥取県の西部（伯耆）と岡山県の中中部（備中）を結んでいる伯備線に、「方谷駅」がある。『岡山県大百科事典』には、「高梁市^{たかはし}中井町西方の高梁川左岸にある国鉄伯備線の駅。松山藩幕末の学者山田方谷にちなんでつけられた国鉄唯一といわれる人名の駅」と記載されている。

当初、「中井村の「中井」と付けられる予定だった。駅用地の半分は山田方谷の旧宅跡であり、方谷が子弟を教えた長瀬塾の跡でもあったので、ぜひ方谷先生の名を後世に残したいと地元民の猛運動が始まった。が、ときの鉄道省は、人名をつけた駅は前例がない」といって、どうしても受け付けてくれぬ。困ったところで一計を案じた。中井村に西方という地名がある。そこで、『方谷先生は、西方の谷』を号にされていた。つまり、人名ではなく土地の名だ』と、無理にこじつけ、方谷に私淑した当時の小川平吉鉄道大臣に話を持ち込み、いまの駅名がついた」というエピソードが伝わる。つまりは、現在に至るまで『山田方谷』は備中の人々に慕われていると思わざるを得ない。

幕末における政治家、陽明学者であつた方谷は、備中松山藩（現在の高梁市を中心とした地域）で、今でいう最高財務責任者（CFO）にあたる元締兼吟味役として、在任七年という短期間のうちに藩の財政再建を成し遂げ人物である。一説には、十万両の借財を完済、逆に十万両の蓄財を成し遂げたという。根底に、民が潤るおわねば国（藩）は富まぬ、との信念が垣間見られる。現代の為政者が学ぶべき手本であろう。

方谷は、河井継之助に『至誠惻怛』^{しせいそくだん}という王陽明の一節を贈っている。まごころ（至誠）と、いたみ悲しむ心（惻怛）の二つを兼ね備えて生きることが、人としての基本姿勢であると説く。「孔子、孟子の教えを会得してなお足らざるところが、この「至誠惻怛」の教えと解するが良い」とも。陽明学（知識と行動を二つに分けることは出来ない。「知」と「行」はもともと一つのもの＝知行合一）である。この時期、官学である朱子学（まず知ることが大切で、知って初めて行うことが出来る＝知先行後）に対抗する学説として危険視する向きもあったようであるが、後にこの教えを方谷の弟子で二松学舎大学を創設した三島中洲（倉敷市中島出身）が、方谷の精神を表すものとして今に伝えている。

方谷駅の向かいの山側に、「山田方谷先生旧宅址」の碑がある。また、高梁川を挟んで南西側の国道百八十号線沿いには、河井継之助が方谷の元を去る際に振り返り、三度土下座を繰り返したという「見返りの榎」が残されている。

露台の桜ろだい さくら

桜台楼主人

雨晴あめはれて台上だいじょうに 芳醇ほうじゆんを酌くめば

片片飄飄へん ぺん ひよう ひようとして 醉唇すいしんに舞まう

何ぞ故なん ことさらに桜花おうか 艸語きようごに従したがうや

淡紅地たんこうちに敷しいて 復春またはるを過すぐ

露台櫻

平成二十四年春

雨晴臺上酌芳醇 片片飄飄舞醉唇
何故櫻花從艸語 淡紅敷地復過春

（語釈）○露台：（我が家の）テラス。○芳醇：香りの良い酒。○片々：ここでは花びらのこと。○飄々：風に吹かれて翻る様。○酔唇：酔った人の意。○鄴語：鄴は于武陵の本名。語は句語「花開いて風雨多し・酒を勧む」詩。○淡紅：桜の花びらの色。

（通釈）雨が晴れたのでテラスに出てうま酒を飲めば、咲いた桜の花びらが盛んに風に吹かれて私の前で舞い散る。飛び散った桜の花びらはテラスに散り敷いて今年もまた、春が過ぎて行く。

※コロナ禍下、三年目の春を迎える。果たして大つびらに飲めるかどうかが常に念頭にある。

私は平成十七年から丸三年間思うこと有って断酒を実行した事もある、その時は「桜台楼主人」と名乗る手前酒無しで、よくぞ咲いたと枝に手を触れ桜を愛でた。少々静かすぎた。今年はいよいよコロナ衰退を願って独り杯を上げねばなるまい。そして世界平和を祈って。

様々な活動や行事がどうなるのか不安定なままの三年だ。ウイズコロナも深刻だが世界の状況はウクライナ問題が心配である。ロシアは近代史に歴史を繰り返していると云う他ない。戦闘が始まってどのように展開するのだろうか。今三月初旬、私共は是れも見守る以外無い。

さて、我が家の枯れた小さな庭に桜の蕾がほころび、やがて萌えいずるような緑が掩う。間違いなく今年も春が到来する。「花開いて風雨多し」と于武陵。「清明の時節雨粉々・杜牧」と詩人は吟じている。私は春先の葉桜に最も爽やかな魅力を感じているが、やはり桜が開き始める時には「咲き急ぎするなよ」から始まって「よく咲いたな」と毎日相対する桜を愛でている。植物愛好家が言うに、枝に触れて愛でると口をきかない植物はちゃんと感じて飲ぶんだとか。私もささやかな表現を実行している。

父を慕ひて

今泉由利

神澄 かみすます 父を慕う融々の気 ちち した ゆうゆう き

杏林良医亦有情 きようりんりよういなおうじよう

志尚は芳菲にして感慨多し こころざし ほうひ かんがいおお

雄心好在天明に到る ゆうしんこうざいてんめい いた

澄神父慕氣融融

杏林良醫亦有情

志尚芳菲多感慨

雄心好在到天明

語釈 澄神Ⅱかみすます

杏林Ⅱ名医

亦有情Ⅱうれう

芳菲Ⅱうつくしい花、 茲み深い

志尚Ⅱ志高く

医師として患者さんに接する父にあこがれて育ちました。
亡くなってしまった今も、私の内に父が居て下さいます。

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄 翁

長息・長生き

肺は呼吸の臓器なり
人の息を主る

息をするとは生きること
息が身体を整える

息の長短、深淺が
生命の働き左右する

長い息では、気が降りて
落ち着き 頭も働いて
深い息では、気がめぐり
お腹も身体も元気になる
焦りや怒りは 気が昇り
息も短く はやくなる
悩みや思考は 気が結び
息は浅くて 気がとどまる
これでは病と仲良しじゃ

ゆったり呼吸が命を助く
息が身体を整える

呼吸にや 2つの息がある
呼吸は肺の気 代謝の気
吸気は腎の気 落ち着く気
吸って吐いてのバランスが
身体を元気にする秘訣

息の要は“吐く”息ぞ
下腹引き締め、鼻で吸い
引き締めたまんま、吐き切
るぞ

ゆっくりゆっくり最後まで
吐く息腹に落とし込め

そしたら空気が入ってくる
自然と深い呼吸になる
自然と長い呼吸になる
息が長けりゃ長生きじゃ
人の長生き 長息じゃ



歩くは消化

歩くは胃腸を動かさず
食べたら適度に歩くとよい
手足が動けば胃が動き
消化を促し 元気になる

脾胃は消化の臓器なり
脾胃の働き 腑を

動かし 栄養めぐるなり

脾の臓 消化の要なり

胃袋食べ物受ける場所

脾胃が仲良く働いて

内臓・腑元気になる

脾胃の働き石臼なり

上の石臼 脾の働き

下の石臼 胃の働き

穀物、食べ物、元気の素

上が動いて 穀を挽く

脾胃は手足（四肢）を主

石臼取っ手は手足なり

四肢の動きが臼動かす

臼が動けば消化でき、
栄養熟せて 気血となり
動いて、めぐりて、元気になる

石臼ぐるぐる 粉が出る
粉が出てくりや 気血となる
ぐるぐる回る石臼が、
気血の充実、人の元気をつくる素

食べたら適度に動きましよう
食べてすぐ寝りや牛になる
食べたら適度に歩きましよう
片付け終えたら歩きましよう

歩くは人を 助くなり
歩くは消化を 助くなり



「氷魚」のことから (255) 岡本八千代

また正月がくる。なんとクールな気持ちなんだろう。庭の野牡丹の花がまだ咲いている。その紫色の花びらが、朝の日、夕の日、夕べの日ごとに透けて、かすかに色が変わり美しい。平成十七年、西暦二千五年をむかえようとする私の老、やはり、「自然法爾」的に暮してゆけるならば幸わせと思いつつ。

子規の新年の歌を書きとめます。

(1) あら玉の年の三年を臥し、我今日起きて坐りぬうそにはあらず

(2) 新玉の年の始と豊御酒の屠蘇われのみぬ病いゆがに

(3) あら玉の年のはじめの七草を籠に植ゑて来し病めるわがため

右の(1)は、明治三十三年の「ある人へ」の前書きがあります。ある人とは誰か？他の歌の前書きに「ふもとさちをなど来りたるに」とありますから、岡麓か、伊藤左千夫か長塚節か、ほか誰か？でしょう。

(2)の歌も、おそろく、常々子規を囲める親しい友人たちかと思いますが。或は碧梧桐か、高浜虚子、絵の友だち中村不折かも知れません。

(3)は、明治三十四年の竹乃里歌以後の新年の歌です。これは、随筆「墨汁一滴」の中に、「一月七日の会に麓のもて来しつとこそいどやさしく興あるものなれ。長き手つけたる竹の籠の小さき木の葉にやあらん敷きなして土を盛り七草をいさ、かばかりづゝぞ植ゑたる。一草毎に三四寸許りの札を立て添へたり。正面に亀野座といふ札あるは藁の如き草なり。

こは佛の座とあるべきを縁喜物なれば佛の字を忌みたる植木師のわざなるべし。其左に五行とあるは厚き細長き葉の稍、白みを帯びたる、こは春になれば黄なる花の咲く草なり、此等皆寸にも足らず。其後に植ゑたるには田平子の札あり。はこべらの事か。眞後に芹と薺とあり。薺は二寸ばかりも伸びてはや薺のふゝみたるもゆかし。右側に植ゑて鈴葉とあるは丈三寸許り小松菜のたぐひならん。眞中に鈴白の札立てたるは葉五六寸ばかりの赤蕪にて紅の根を半ば土の上にあらはしたるさま殊にきはだちて目もさめなん心地する。源語枕草子などにもあるべき趣なりかし。」と子規は書いております。

かような交友あつてこそ子規、また子規あつてこそ交友たち、そのコミュニケーションのすばらしさ、病床よりどこへもゆけない子規の創造性はこうした中に培はれていたことでしょう。

子規は、自分の命を、おおよそ十年とひとり心に思つて、その年月の間に、何が出来るか、何かを求め実践してゆこうと決めていたようです。

子規は、自分の体の痛みに、はりさけるばかりに泣きわめき、少しは痛みのうすれた時は、かなり冷静になり、好機嫌になり、文学への情熱を燃やしつづけていった人でした。

交友の中に出てきた岡麓なる人は、わが三河アララギの御津磯夫先生は早くから交流があつて、先生の部屋には、「事実唯眞」なる岡先生からの扁額が宝物として掲げられています。いつも御津先生からは、「事実唯眞」ということこそ「アララギの歌の眞髓である」と教えられてきました。

しかし、私にはまだどういふことなのか創作上にはさだかではない気もちです。事実を写生して、己のまことを観入してゆくのかなあと思ひながらいるのです。

編集室だより【二〇二二年二月】

今泉 由利

○ニューヨークと、ロスアンゼルスと、日本とを混じえての、娘達の仕事。仕事の性質状、時差による時間差、早朝から、深夜に渡る時間帯に仕事をしている。「帰宅するタクシーに乗る四十分が、とてもつらい。引越しをする」と提案して、あれよあれよと思う間に、引越し先が決まり、私の二十年近くなる王子での生活は、ダンボールに詰められ、恵比寿に運ばれた。

○王子神社の前にある、北区役所は、王子住いのすぐ近く、転出の手続をした。

移転先の、渋谷区役所は、大きなNHKの近くにあり、かなり規模が違い、びっくり。転入の手続をした。これで、娘達の都合良く過せる場所となる。

○ただただ我ままにまかせ、自身が描きたいから描き続けた絵類が沢山。読みたいから読み、積み重なった本。外国、日本、で集めずにはいられなかった民芸品など。

自分専用の、小さな博物館を造る途上だから、いとおいしい品々で、身動きできなくなっていたのに、私もう

とも、たちまち、新しい住いに移り終わった。私の大切な品々と、居心地良いところになってゆくはずです。

○渋谷区のはじっこにあたり、ちよつと歩いてみたら、白金台の、昔からが続いているような。思いもかけなかった状況が拡がり、また新しい自分になれるかもしれない。

○三河アララギに携われることは、父と母と、父と母との仲間と、ご一緒させていただいていることです。また新しい、今に居る三河アララギになってゆきます。

○まだ固定電話は、ありません。

○今泉由利の携帯電話だけです。
090-8434-8646

○新住所 〒150-0013
東京都渋谷区恵比寿3丁目45-3
フォレストヒルズ302

E-mail imayurizm@gmail.com

美しく整いましたら、ご報告いたします。

三河アララギ編集室を、どうぞお訪ね下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フォーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 〇九〇・八四三四・八六四六

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail imayurizm@gmail.com

◇編集・発行 今泉由利

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
編集室までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、
メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アラ
ラギ」誕生。

◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続いてき
ました、続いてゆきます。